

悲しき口笛

映画文学人生論

原作：竹田敏彦	(1949年)	脚色：清島長利
監督：家城己代治	(1949年)	撮影：西川亨
出演：田中ミツコ	美空ひばり	音楽：田代與志
田中健三	原保美	作詞：藤浦洸
勝川修	菅井一郎	作曲：万城目正
勝川京子	津島恵子	

丘のホテルの 赤い灯も 胸のあかりも
消えるころ

家城己代治監督、美空ひばり主演の映画『悲しき口笛』の原作者は竹田敏彦。その原作を探したが、図書館でも古本屋でも見つからない。まあ、いいだろう。この映画の場合は音楽が原作とみてよいと考え、原作を読むのはあきらめた。

丘のホテルの 赤い灯も

胸のあかりも 消えるころ

みなと小雨が 降るように

ふしも悲しい 口笛が

恋の街角 露地の細道流れ行く

作詞は藤浦洸、作曲は万城目正、歌い手は当時十二歳の美空ひばりである。小学生が歌うのにふさわしい曲とは思えないが、これがヒットした。当時十歳の私も詞を覚え、今も忘れていない。

ということ実は私がオンチではない証拠かもしれないが、カラオケのマイクを持つようなことはないが、その気になって練習すれば、そこそこの歌唱力で歌える可能性もあったのではないかとも思うが。現実にはその後、音感がほとんど発達しなかった。

音楽の流行で世代をはかるとすれば、私はビートルズの世代ではなく、美空ひばりの世代。音感が発達しなかったのはそのためという気がする。



悲しき口笛

映画文学人生論

映画のあらすじは、妹のために「悲しき口笛」という歌をつくった兄が戦地から復員し、その歌のおかげで、行方不明になっていた天才少女歌手の妹と再会をはたすことができたというお涙ちようだいもの。

私は映画を観て涙を流すようなことはめつたにないが、『二十四の瞳』『砂の器』、それにこの『悲しき口笛』の三本だけは不覚をとった。理性では作り話だとわかっているのに、不思議なことに、情緒のダムはもろくも決壊する。

その深層心理を考えてみると、浮浪者があふれていた終戦直後の世相とかかわりがあると思う。その頃、私は少年時代を過ごした。浮浪児の経験はないが、フランスの作家マロの『家なき子』を読んで感動したことがあり、浮浪児の運命に感情移入することはできる。

美空ひばりは『家なき子』のレミ少年と似ている。行方不明だった兄と再会し、天才少女歌手としてデビューできて、よかったね。拍手。

その後、ひばりはスターとして活躍を続け、昭和四十一年には、こんな曲を歌った。

ひとり酒場で 飲む酒は
別れ涙の 味がする

その『悲しい酒』を歌う気には私はなれない。

浮浪児の悲しき口笛遠雲雀